千葉経済大学短期大学部
研究紀要　第10号　1～11（2014）
研究論文

マリア・ガイス＝ヴィットマンの教育思想と匿名出産

― ドイツにおける匿名支援と社会教育の関連について ―

柏木　恭典

Educational thought and anonymous birth in Maria Geiss-Wittmann

― the relationship between anonymous support and social pedagogy in Germany ―

Yasunori KASHIWAGI

Abstract

This thesis discusses the problem of the baby hatch（Babyklappe）and anonymous birth in German. At first the discipline of anonymous birth will be analyzed, interpreted. The most important person for anonymous birth is Maria Geiss-Wittmann who performed“Moses Project”in 1999. And, the relationship of anonymous support and the educational thought are clarified. As a result, it became clear in her that social pedagogy and anonymous birth are related. As the second viewpoint, I analyze about the latest issue of the anonymous support in Germany. Finally, the problem of the deep relationship between anonymous birth and social pedagogy will be described based on the educational thought of Geiss-Wittmann.

Key-words
Maria Geiss-Wittmann, Anonymous Birth, Babyklappe, Donum Vitae, Moses Project.

キーワード
マリア・ガイス＝ヴィットマン、匿名出産、赤ちゃんポスト、ドーヌム・ヴィテ、モーセ・プロジェクト

はじめに

2000年４月８日、民間教育団体のシュテルニパルク（SterniPark）が、ドイツ国内で世界初の赤ちゃんポスト（Babyklappe）を設置し、その運用を開始した。この時、シュテルニパルクがそのモデルとして採用したのが、その前年である1999年にいち早く匿名支援を公的に表明したバイエルン州アンベルク（Amberg）のカトリック女性福祉協会（SkF）の「モーセ・プロジェクト（Moses Projekt)」であった。このモーセ・プロジェクトは、「捨て子」をなくすために考案された匿名での相談、支援、出産を行う小さな町の小さな取り組みであった。ただし、このモーセ・プロジェクトは、翌年の2001年に、ドーヌム・ヴィテ（Donum Vitae）に引き継がれる。ドイツにおける赤ちゃんポストの背景を考える際に、この一連のプロジェクトを無視することはできない。2014年の今日もなお、このプロジェクトは実施され続けている。

これまでの赤ちゃんポストに関する研究においても、アンベルクが匿名支援の構想を、その中でもとりわけ匿名出産の構想を打ち出した場所として、既に挙げられている（Swientek、2001)。しかし、カトリック女性福祉協会、及びドーヌム・ヴィテがどのような団体であり、どのような背景から匿名支援という発想を得たのかについては日本においても、またドイツにおいてもほとんど語られていない。ただ、この両団体の代表を務めたマリア・ガイス＝ヴィットマン（Maria Geiss-Wittmann）については、ドイツ有力誌であるシュピーゲル（Spiegel）が、「ある勇敢な女性（Eine Frau mit

Mut)」としていち早く報じた－この記事については、柏木が全文を翻訳し公表している（柏木、2013)。

さらに難しい問題がある。それは、匿名出産を中心とする新たな匿名の母子救済支援を構想した当のガイス＝ヴィットマンが、赤ちゃんポストの新たな設置に異議を唱えている、という問題である。赤ちゃんポストは、匿名出産と並んで積極的に取り上げられる新たな匿名支援の中核に位置づけられるものである。にもかかわらず、ガイス＝ヴィットマンはこれを承認しない。事実、彼女が代表を務めたドーヌム・ヴィテ・アンベルクには、赤ちゃんポストは1999年から今日に至るまで一度も存在していない。しかも、上述したように、シュテルニパルクが自身のモデルとして採用したのが、このガイス＝ヴィットマンらのモーセ・プロジェクトであった。なぜこうした齟齬が生じているのか。双方共に、緊急下の母子支援に介入し、彼女らに同伴することを目指しているのに、こうしたズレが生じてしまうのか。そのズレの背後にある論理はどのようになっているのか。

そこで、本論ではガイス＝ヴィットマン自身に光を当て、まず、彼女がなぜ、どのようにして匿名支援、匿名出産というこれまでにない支援方法を生みだし、それを実際に行うに至ったのかを明らかにしたい。そしてその上で、なぜ匿名支援という新たな方法を生み出した彼女が、ハンブルクで生まれた赤ちゃんポストを容認し得ないのか、その否認の根拠はいったいどこにあるのかについて解明していきたい。

第一節　マリア・ガイス＝ヴィットマンの歩み

なぜガイス＝ヴィットマンは、1999年に匿名支援及び匿名出産の構想をもつに至ったのか。この問いは、筆者の疑問であるのと同時に、赤ちゃんポストと匿名出産に関する先駆的研究を行ったクリスティーネ・シュヴィーンテク（Christine Swintek）の問いでもあった。ソーシャルワーク、特別支援教育、精神病理学等に関する研究を行ってきた彼女は、自身の著書の中で次のように問うている。「いったいどのようにして1999年に突然、この[筆者注：匿名出産という]議論が起こり、匿名出産が開始されたのか、なぜ1999年だったのか。そして、なぜバイエルンだったのか。なぜ、元ＣＳＵ（Christlich-Soziale Union）議員であり現カトリック女性福祉協会並びにドーヌム・ヴィテの代表である人物によってだったのか…」(Swintek, 2001：11)。シュヴィーンテクは、この書の冒頭でこのようにガイス＝ヴィットマンについて問うている。そして、先に挙げたシュピーゲル誌の「ある勇敢な女性」の記事を引用しつつ、次のように指摘している。「この『勇敢さ』は、とりわけ、ガイス＝ヴィットマン氏が、『現行のドイツ法を変えよう』と欲し、彼女が『このプロジェクトの全責任を負った』ということ、そして『罰金のリスクも負う』ことを欲したことにあったし、今もそうあるのである」(Swientek, 2001：12)。そして、「ガイス＝ヴィットマンはこの構想のために自身の身を捧げた」、とシュヴィーンテクは評しているものの、それ以上に深く究明してはいない。

では、ガイス＝ヴィットマンとはいったいいかなる人物なのか。そして、いったいいかなる背景から匿名支援及び匿名出産という構想が生まれたのだろうか。ガイス＝ヴィットマンについての文献はドイツ語圏においてもほとんど存在しておらず、また彼女自身、先のシュピーゲル誌以外では公に自らについて語ることはほとんどなかった。

ガイス＝ヴィットマンには実に様々な顔がある。彼女の全体をつかむために、ここで彼女のこれまでの歩みについてまず示しておきたい。ガイス＝ヴィットマン自身によって書かれた経歴文書と筆者とのインタビューに基づいて、その歩みを明らかにしていこう。

ガイス＝ヴィットマンは、かのヒトラーが国家元首となった1934年の３月３日にオーバープファルツのヴァルトナープで生まれた。その後、第二次世界大戦に突入するが、彼女はそうした時代に幼少期を過ごし、戦後、高等専門学校（Fachschule）で社会教育を専攻し、1958年、社会教育士（Sozialpädagoge）の国家試験に合格する。ドイツとその周辺国には社会教育学という独特な伝統があり、固有の領域として重視されており、隣接領域であるソーシャルワークと区別されている。

社会学的方法を使って教育を分析する教育社会学とは別に、「社会における教育活動」、もっと言えば「社会問題を生み出す社会と教育との関係」について論じるのが社会教育学である（大串、2008；3、2011：145）。ガイス＝ヴィットマンの思考の根底に、このドイツ伝統の社会教育学の文脈が存在する[1]。

さて、国家試験合格後の1959年、ガイス＝ヴィットマンは、カリタス会ミュンヘンに所属する。1960年から1965年までの5年間、アンベルクのカトリック女性福祉協会に属し、社会教育士としての相談業務を行う。その間に、彼女は自ら「Missio Canonica」という小中学校の「宗教」の授業を行う教員資格を取得する－教会によって認定されるこの資格がなければ、ドイツでは宗教の授業を行うことはできない－。この資格取得の後、1965年から1970年にかけて、彼女はそれまでの経験を踏まえ、レーゲンスブルク教区の小・中学校で、「宗教」の授業の専門教員として教育活動に従事する。ドイツの公立学校では、小学校からギムナジウムまで、この宗教の授業の実施が義務づけられている。ガイス＝ヴィットマンは、「この時代に、私は生徒たちと宗教とは何か、神とは何か、幸せとは何かといったことを語り合った」、と述べる。

ガイス＝ヴィットマンに転機が訪れるのは、1970年である。この年に、彼女は女性初の州議会議員に当選する。彼女は、バイエルン州最大の保守政党CSUの一員であった。その後、1986年までの16年間、彼女は州議員としての任務を全うする－ただし、この期間も彼女はアンベルクの市会議員を継続する－。また、議員当選の翌年、1971年に結婚し、1973年に長女を出産する。彼女が37歳の時だった。彼女自身も、筆者との対話の中で、「私は晩婚だった」と述べている。もともと社会的な事柄に関心をもっていたガイス＝ヴィットマンは、社会教育士としての経験とMissio Canonicaの経験を踏まえ、政治の世界に飛び込み、そこでさらに地方行政のために尽力したのである。

子育てが落ち着く1987年に、ガイス＝ヴィットマンは、カトリック女性福祉協会アンベルクの常任理事となり、1991年から2006年までの間、理事長として活躍する。まさにこの理事長だった時期に、彼女の名はドイツ全土で一気に広まることとなる。すなわち、1999年、極限の状況下にある妊婦が医療機関において匿名で出産することのできるいわゆる「匿名出産」を目指すモーゼプロジェクトを立ち上げたのである。

だが、この頃、ドイツ司教が、これまで主として行ってきたカトリック系相談所は国家的な（Staatlich）妊娠葛藤相談業務から撤退することを命じた。これに対して、妊娠葛藤相談の重要性を認知していたカトリック系相談員らが、2001年、「妊娠相談業務をさらに徹底するために、ドーヌム・ヴィテを創設したのである」（DER NEUE TAG, 13.10.2011）。ゆえに、このドーヌム・ヴィテはカトリック教徒らによって設立されてはいるが、カトリック団体ではない。そのまさに中心にいたのが、ガイス＝ヴィットマンだった。

2001年から2008年まで、ガイス＝ヴィットマンはバイエルン州ドーヌム・ヴィテの代表を務めることになる。ドーヌム・ヴィテが作成したパンフレットに従えば、ドーヌム・ヴィテは、ラテン語で「命の贈り物（Geschenk des Lebens）」を意味しており、「自主的な、公的－合法的民間組織（ein eigenständiger bürgerlich-rechtlicher Verein）」である。妊娠葛藤のあるなしを問わず、あらゆる妊娠・出産に関する相談業務を行う全国的組織で、ドイツ全土に200箇所以上の相談所を有している。そのスローガンは、「相談し－保護し－継続支援すること（Beraten-schützen-weiterhelfen）」である。

このように、ガイス＝ヴィットマンは、女性であり、社会教育士であり、また教師であり、クリスチャンでもあり、母でもあり、議員でもあり、公益団体の州代表も務めてきており、政治、行政、教育、福祉と広く活躍してきた人物であり、精力的に社会教育・社会福祉活動のために動き回ってきた人物であり、ドイツで最も有名なジャーナル誌であるシュピーゲルにおいて、「勇敢な女性」と讃えられた人物であった。現在は、このドーヌム・ヴィテの後方支援を行っており、彼女の後任として、ガイス＝ヴィットマン同様に社会教育士のヒルデ・フォルスト（Hilde Forst）が同団体の代表を務めている。なお、筆者とガイス＝ヴィットマンとの

対話については、生命尊重センターが発行している『生命尊重ニュース』（2013年10月号～12月号）で詳しく述べた。

以上が、現時点で筆者が知り得るガイス＝ヴィットマンのこれまでの歩みである。ここで無視できない点が二つある。その一つは、ガイス＝ヴィットマンの基本的な知として社会教育・社会福祉（ソーシャルワーク）の文脈がある、ということ。そしてもう一つは、カトリック女性福祉協会とドーヌム・ヴィテ、すなわちキリスト教カトリック系団体の文脈が存在する、ということである。ドイツ伝統の社会教育という教育学的文脈、そしてキリスト教という宗教的文脈の中に、ガイス＝ヴィットマンは存在する。この点については、第三節以降で再度詳しく論じたい。

第二節　ドーヌム・ヴィテの主な活動内容

では、実際にドーヌム・ヴィテはいかなる活動を行っているのか。この団体の活動内容については、我が国では全く明らかにされていない－熊本大学のトビアス・バウアー（Tobias Bauer）が「ドイツにおける赤ちゃんポスト及び匿名出産をめぐる現下の議論にみられるキリスト教諸教会と同福祉事業団の立場」（2011）の中で若干触れている程度である。

筆者は、このバイエルン州ドーヌム・ヴィテ・アンベルクより直接、2012年度の活動報告書（Kurzbericht 2012）を入手した。そこで本節では、この活動報告書に基づいて、同団体の活動内容について示していきたい。この活動内容を示すことで、赤ちゃんポストを設置したシュテルニパルクの取り組みとの類似性をも確認することができるだろう。

ドーヌム・ヴィテは、上述した報告書によれば、「妊娠のもろもろの疑問に応じる公的に認められた相談所」と明記されている。「Staatlich anerkannten Beratungsstelle」とあり、国家によって承認されている、ということが全面に打ち出されている。児童相談所のような公的な行政機関ではないが、公的に承認されている、という意味で、「公益民間団体」と明記してよいだろう。また、ドーヌム・ヴィテ・バイエルンは、ドイツ語で「Donum Vitae in Bayern e.V.」と表記されている。ここで使われている「e.V.」というのは、「eingetragener Verein」の略記であり、一般に日本語には「（一般）社団法人」と訳されるケースが多い―この場合、「（一般）財団法人」ではない、というニュアンスが含まれる。

2012年、バイエルン州アンベルクエリアの相談所には、合計1090名からの相談が寄せられた。この1090名の内訳は、一般的な妊娠相談が女性277名、妊娠葛藤相談（刑法219条に基づく）が女性189名、前年の出産後の同伴支援が250名、子どもを望む相談（Kinderwunsch-Beratung）が女性31名、流産（Fehlgeburt）・妊娠人口中絶・出生前診断（Pränataldiagnostik）・性教育等に関する相談が女性36名、自身のパートナーの妊娠に関連する不妊相談・出産後の相談等が男性167名、夫婦問題・家族計画やライフプランに関する相談が男性13名、その他127名（両親、保育士、教師等からの相談）である。このデータから、相談の多くが女性であること、約２割弱の男性が相談に来ていること、また夫婦に留まらず、保育士や教師からの相談にも応じていることなどが読み取れる。なお、これらの相談は全て無料で行われている。

では、具体的にはどのような相談やサービスを行っているのだろうか。「妊娠と出産に関するあらゆる疑問や問題についての相談」、「刑法典219条（緊急下及び葛藤状況下の妊婦の相談）に基づく妊娠葛藤の相談」、「法的ないしは任意の給付や支援に関する情報」の提供、「資金支援の仲介」、「モーセ・プロジェクトにおける匿名相談と匿名支援」、「妊婦又は母子のための一時的住居」の提供、「人工妊娠中絶、流産、死産に関する相談」、「出生前診断前後の相談と同伴」、「夫妻から父母への移行に関する相談」、「家族計画、避妊、性に関する悩み相談」、「実現せぬ子どもへの望み（Kinderwunsch）－ザラ－プロジェクト」が主な相談・サービスの内容である。これらの相談やサービスの提供は、希望があれば全て匿名で対応することも可能となっている。

このように、ドーヌム・ヴィテの活動内容は、妊娠相談や妊娠葛藤相談に留まっていない。注目すべき幾

つかの取り組みがある。

第一に、ドーヌム・ヴィテが「社団法人バイエルン身体及び重複障害者州連盟[2]」というフェアアインと協働で行っているプロジェクトである。これは、出生前診断の前後に発生する両親の様々な問題に対して相談と同伴を行う支援である。

第二に、性教育的な予防（Prävention）の取り組みである。2012年には、701名の若者たちに予防プログラムを実施した。

第三に、上述したモーセ・プロジェクトである。このプロジェクトは、匿名相談、匿名支援、匿名出産という三つの柱で構成されており、「匿名性」を全面に打ち出して、望まない妊娠や出産に関わるあらゆる人に対して、助言を与えたり、同伴したりしている。ズルツバッハ＝ローゼンベルクの聖アンナ病院、アンベルクの聖マリーエン病院、その他の診療所等との提携で、匿名での妊婦検診、匿名での分娩、一時的な住居の提供等を行っている。モーセ・プロジェクトの一般配布用パンフレットにも、大きな文字で「匿名の（ANONYME）」と表記されており、匿名性がこのプロジェクトの最重要概念であることが窺えよう。

第四に、「星になった子どもたち（Sternenkinder）」という取り組みがある。これは、500g以下にして出生以前に亡くなった赤ちゃんの葬式（Trauerfeier）と埋葬（Beisetzung）の儀式を通じて子を亡くした両親のケアを行うものである。この取り組みは、2003年12月から実施されている。現在のところ、３月、６月、９月、12月の第一水曜日の14時から定期的に行われている。これを通じて、同じように子を亡くした別の両親と共に自身の悲しみや痛みを克服することを目指す。同時に、生れずして亡くなった子をもつ親たちの集う「喪カフェ（Trauercafe）」も行われている。

第五に、ザラ・プロジェクト（Sara-Projekt）である。これは、「望まれない不妊（Ungewollte Kinderlosigkeit）」に対する新たな取り組みで、2012年４月から始められた新しいプロジェクトである。不妊は、他者が触れてはならないタブーの一つと考えられている。当事者もまた自身やパートナーの不妊について誰にも語ることはしない。このことから、ドーヌム・ヴィテはこの不妊問題を専門的に支援する必要性から、不妊治療や再生医療に取り組む産婦人科医ユルゲン・クリーク（Jürgen Krieg）とアンベルク・聖マリーエン病院と協働で、ザラ・プロジェクトを開始した。「子どもが欲しい、けれどその望み（Wunsch）が叶わない」ということに苦しむ夫婦の相談や同伴を行っている。

第三節　匿名出産と赤ちゃんポストをめぐる思想的背景の分析

前節までにおいて、ガイス＝ヴィットマンとドーヌム・ヴィテの内実について示してきた。ここまでがいわゆる本論における問題設定に入る前の予備的考察であった。

これらの議論を踏まえ、本論で主として問おうとするのは、第一に、なぜガイス＝ヴィットマンは、カトリック女性福祉協会及びドーヌム・ヴィテにおいて、匿名支援という新たな母子支援の可能性を見出し、それを実施するに至ったのか、という思想史的問題である。そして第二に、その匿名支援の実施を実際に踏み切ったガイス＝ヴィットマンが、なぜシュテルニパルクに端を発する赤ちゃんポストに反対するのか、というドイツにおける赤ちゃんポスト論争の根底に関わる問題である。この二つの問題は、その根底において、「匿名支援をどのように考えるのか」という意味で重なり合っており、全く異なったものではない。ガイス＝ヴィットマンにとって、匿名支援とはいったいどのようなもので、いかなる背景からこれを構想したのか。また、匿名支援を提唱したにも関わらず、なぜ赤ちゃんポストは認められないのか。

モーセ・プロジェクトを開始したガイス＝ヴィットマンと、「捨て子プロジェクト（Projekt Findelbaby）」を開始したシュテルニパルクは、時代的にも、思想的にも、実践的にも重なる部分が極めて多い。具体的に述べれば、双方とも、1999年に匿名支援の実施を表明している。先にプロジェクトの実施を表明したのは、ガイス＝ヴィットマンだった。だが、実際にドイツ国内で初めて匿名出産の支援を行ったのは、シュテルニパ

ルクだった。「ドイツ国内で最初に周知されるに至った匿名出産は、フレンスブルクで行われた。シュテルニパルクの支援を受け、またシュテルニパルクのマネージメントの下で、2000年12月に一人の子ども（匿名）が生まれた。その子は、エヴァ・ロッテと名付けられた」（Kuhn, 2005：149）。フレンスブルクはドイツ最北の街、デンマークとの国境沿いに位置する街であり、シュテルニパルクを設立したユルゲン・モイズィッヒ（Jürgen Moysich）の暮らす街である。無論、どちらのプロジェクトが最初に匿名出産の支援を行ったかは重要ではない。しかし、この事実は双方にとって周知のことであり、互いに互いの動きに注目していたと言えるだろう。つまり、同時代において、どちらも匿名での妊婦・母子支援の重要性を感じ、実際にその支援を開始しており、動機や目的はほぼ同じと考えてよい。

それだけではない。ガイス＝ヴィットマンとシュテルニパルクは、どちらも匿名出産を打ち出す前から、ドイツ伝統の教育学的概念である「社会教育」、あるいは「青少年支援（Jugendhilfe）」を自分たちのコンセプトにしてきた、という点で共通している。シュテルニパルクは、団体創設年である1990年以来、今日に至るまでずっと「青少年支援」を自分たちの活動の中心に置いてきた（柏木、2013）。また、上述したように、ガイス＝ヴィットマンも同様に青少年支援のベースとなる社会教育を学問的基礎とし、社会教育士としてのキャリアも積んでおり、宗教の授業を行う教師でもあった。ただし、同じ教育を専門としつつも、その根底は異なっている。モイズィッヒは、教育学者であるが、新教育と批判理論を基盤に初等教育・保育を実際に行ってきた実践者である。そのまなざしは常に子どもにあった。彼は新教育や批判理論といったもっぱら教育哲学や当時の現代思想を学びつつ、それに基づいた実践を生み出してきた。その一つの到達点が、「アウシュヴィッツ以後の教育（Erziehung nach Auschwitz）」であった（Moysich, 2005：4）。その一方でガイス＝ヴィットマンは、社会教育を基盤とし、また社会教育士として、主に母親への支援、相談、同伴の実践を積み重ねてきた。そのまなざしは常に母親に、ないしは母子関係に向けられている。

また、ガイス＝ヴィットマンもシュテルニパルクも、共に「政治的（politisch）」な側面を強くもっている。上述したように、ガイス＝ヴィットマンはバイエルン州最大保守政党CSU議員であった。また、モイズィッヒはフランクフルト学派の批判理論を学びつつ、政治参加を強く意識していた（柏木、2013）。ただし、その立ち位置において違いはある。ガイス＝ヴィットマンはCSU議員であり、カリタス会の一員であり、カトリック女性福祉協会の活動の第一線に立ち続けた女性である。このことから、ガイス＝ヴィットマンはキリスト教カトリックの伝統を重んじ、また政治的には保守の立場を取る。それに対して、モイズィッヒは、学生時代に積極的に学生運動に参加したリベラル派であり、反権威主義（Antiautorität）ないしは反権威主義的教育（Antiautoritäre Erziehung）の立場を取る人物であった。以上の考察から、ガイス＝ヴィットマンの立場、あるいはその思想的背景がうっすらと浮かび上がってくる。彼女の人生は、いわば「権威」を象徴するような場に在り続けた。カトリック（宗教）、社会教育、Missio Canonica、CSU、カトリック女性福祉協会等、厳格で保守的で権威的な諸領域に属し続けてきた。当然ながら、ガイス＝ヴィットマンは緊急下の母子に愛情あるまなざしを向ける敬虔な実践者である。だが、彼女には「斬新な発想」や「新たな社会システム」を認めにくい背景があることも否めないだろう。それに対して、モイズィッヒは反権威主義的であり、新たな社会システムの構築に関心の目を向けていた。彼にとって、赤ちゃんポストは単に赤ちゃんの命を守る装置であるだけでなく、法や社会システムを変革するための方法であった。

とはいえ、ガイス＝ヴィットマンとシュテルニパルクのモイズィッヒの相違は、権威／反権威という二項対立に留まらない。ガイス＝ヴィットマンが赤ちゃんポストを容認できないのは、母親と子どもの関係が完全に断ち切られてしまうからであり、またその支援において、支援者と実の母親との直接的接触が不可能となってしまうからである。匿名出産は、次節で述べる

ように、母親の身元は匿名のままではあるが、支援者と母親は実際に確実にコンタクトを取り、接触し、病院に同伴する。ドーヌム・ヴィテの支援の根底に、「相談」と「同伴」がある。赤ちゃんポストは、この両者が実現しない可能性をもつ。とりわけ出産前の妊婦の医療機関への同伴に力点を置くガイス＝ヴィットマンにとって、緊急下の妊婦が孤立無援の状態で、医療機関外で出産することを容認することはできない。「未受診の妊婦が医療機関の外部で出産することは危険過ぎます。赤ちゃんポストはそれを防ぐことができません。赤ちゃんポストに赤ちゃんを預け入れる前に、つまり出産前に、緊急下の妊婦とコンタクトを取り、そして支援しなければならないのです」。ヴィットマンは、赤ちゃんポストそのものに内含する危険性を指摘する。赤ちゃんポストを知る緊急下の女性は、もしかしたら赤ちゃんポストに子を匿名で預けられることに安心し、そこに希望を見出し、そのために一人で無理にトイレや自室で出産するかもしれない。

このように、ガイス＝ヴィットマンは、彼女の支援の根底にある「相談」と「同伴」の欠如に、赤ちゃんポストの問題を看取している－ただし、それに対して、シュテルニパルクの主任ガブリエレ・ルーフェナッハ（Gabriele Rufenach）は、筆者とのインタビュー（2013年９月４日）の中で、「どんな支援を用意し、こちらがどれだけ相談や同伴を呼びかけたとしても、それでもなお医療機関外で孤立無援の状態で出産し、赤ちゃんを捨てたり殺害したりする女性は存在します。そういう女性・妊婦がいるうちは、赤ちゃんポストをなくすことはできないし、その存在理由は確かにあると思います」、と再反論する。ただし、そうはいっても、シュテルニパルクが医療機関外での孤立無援の出産を認めているわけではない。モイズィッヒも、医療機関外の出産のリスクを強く指摘している。「われわれの下に預けられた子どもたちの3人が、明らかに医療的処置を受けないで母親から生まれている。われわれはその母親たちが完全に孤立して一人であったと推測する。ここに、母親と子どもにとっての莫大なリスク（ein erhebliches Risiko）が示されている」（Biersack、2008：40）。このリスクを踏まえつつも、シュテルニパルクは赤ちゃんポストを廃止しようとはしない。それは、どんな支援－相談や同伴－を用意しても、その支援が届かない女性が常に存在するからであり、ゆえに出産前の支援ではなく、出産後の支援、具体的には赤ちゃんポストや母子生活支援事業を精力的に行っているのである。赤ちゃんポストをめぐる対立は、これまで「生命保護」か「出自を知る権利」か、という対立が主であった。しかし、以上の考察から、全く別の対立軸が存在することが示されたはずである。すなわち、「匿名の出産前支援（相談、同伴、匿名出産等）」か「匿名の出産後対応（赤ちゃんポスト）」か、という対立である。前者を重視すれば、赤ちゃんポストは容認できない。後者の立場に立てば、赤ちゃんポストは不可欠なものとなる。

第四節　匿名出産のガイドラインからガイス＝ヴィットマンを考える

第三節の考察から、ガイス＝ヴィットマンの思想の根底がうっすらと浮かび上がってくる。すなわち、政治的保守性、母親・母子支援の重視、出産前支援の重視である。その根底には、母親と子、あるいは支援者と母子の「関係性」へのまなざしが見てとれるだろう。そこで、本節ではこの点に着目し、彼女によって考案された匿名出産の内実を検討することを通じて、ガイス＝ヴィットマンの思想的背景を捉えていく。

筆者は、2013年８月にアンベルクのドーヌム・ヴィテを実際に訪問し、ガイス＝ヴィットマン自身と直接対話をし、それと同時に、ドーヌム・ヴィテの実際の匿名出産の支援についてのガイドラインを示す手引きを入手した。本節では、この手引きに基づいて具体的な匿名出産の内容について示し、ガイス＝ヴィットマンがこの匿名出産をどのように考え、そしてそこから何を考えたのかについて解明したい。この解明を通じて、ガイス＝ヴィットマンがどれほどこの匿名出産に尽力し、そしてそれをどう乗り越えようとしているのかが示されるだろう。

その前に、まず匿名出産とは何かについて、簡素に示しておきたい。既にドイツ国内で膨大な量の匿名出

産に関する文献が出版されている。ここでは、アレクサンデル・トイベル（Alexander Teubel）の概念説明を挙げておこう。

> 匿名出産は、「通常の」専門医療的出産と同様に行われる。だが、分娩する女性は出産する医療機関に自分の身元（Identität）を伝えることはない。子どもも母親も医療的な処置を受ける。母親自身が望む場合は、医療機関でその後も自身の決断に関する相談や支援を受けることもできる。出産後、母親は医療機関を立ち去る。子どもは医療機関に残される。（Teubel, 2009：23）

既に刊行されている匿名出産の概念規定は、このトイベルの説明とほぼ同じであり、これ以上の意味はもたない。身元を明かさない出産とは、ある意味では、「母子関係の断絶」を意味する。フランスやルクセンブルクにおいては既に匿名出産の長い歴史をもっているが、その生まれた根拠－匿名出産を行おうとした内的動機－は、ドイツの匿名出産とは異にしている。フランスにおける今日の匿名出産は「出生の保護についての1941年９月２日の法律」（西、2001）に由来しており、主に戦時下での望まない妊娠に対する措置として想定されていたと考えられ、またこの時代的には、子どもの権利についてのコンセンサスも十分に得られてはいなかった。だが、ガイス＝ヴィットマンも、シュテルニパルクも、共に身近な場所での児童遺棄や嬰児殺しに胸を痛めて、そうした母親の行為を未然に防ぐために、子どもの生命を守るために、そして、もう一つ、母親がきちんと医療機関で出産できるように、その新たな支援の方法として、匿名出産を思いついている。もっと言えば、「ただ、緊急下にある妊婦と赤ちゃんを救いたい」、という願いからドイツの匿名出産は出発している。

だが、それにも関わらず、この匿名出産の具体的なガイドライン、あるいは実践的なプロセスについては、ドイツ国内のどの文献においても、ほとんど明らかにされていない。というよりもむしろ、匿名出産の具体的なガイドラインやプロセスについての関心自体が乏しかったというべきかもしれない。そこで、本論の最後に、この匿名出産のプロセスに焦点を合わせ、ガイス＝ヴィットマンはどのように匿名出産のプロセスを方法化しようとしたのかを明らかにしたい。

まず、ガイス＝ヴィットマンにとっては、匿名出産は、医療的課題から生まれたものではなく、社会教育学的な要請によって生まれたものであった。彼女が提唱した匿名出産と社会教育との連関については、ドーヌム・ヴィテが作成したモーセ・プロジェクトと医療機関の「取り決め書（Vereinbarung）」の中に見出すことができるだろう。

> 公的に承認された私たち妊娠相談所との協働による匿名出産の提供は、単に法的観点からだけでなく、社会教育学的観点（sozialpädagogische Sicht）から見ても有意義です。というのも、差し迫って困難な状況下にある女性が現におり、彼女たちにはケア（Betreuung）が－ともすれば何年にもわたる同伴（Begleitung）が－必要だからです。（Vereinbarung zwischen der Klinik und dem Träger des Moses-Projekts DONUM VITAE in Bayern e.V. S.2）

この記述が示すように、ガイス＝ヴィットマンにおいては、匿名出産は社会教育学的な観点からして極めて重要なものなのである。当然ながら、医師、看護師、助産師（Hebammen）らとの協働も欠かせない。その「協働」さえ、社会教育学的ともいえなくもない。匿名出産は、その全体からすれば、法的観点、社会教育学的観点、医療的観点、さらには宗教的観点からして有意義ではあるが、少なくとも、ガイス＝ヴィットマンは匿名出産に社会教育的な意義を看取していた。彼女の中では、この匿名出産及びその他の匿名支援は、彼女自身が歩んできた社会教育士という立場から考え出されており、ゆえにそのガイドラインもまた社会教育（ないしはソーシャルワーク）的な影響を強く見せている。

そこで、本論の最後に、「モーセ・プロジェクトの手引き」に基づいて、ドーヌム・ヴィテの匿名出産の支援の流れを確認しておこう。

匿名出産の支援の流れ

①ある女性がモーセ・プロジェクトに電話をかけてくる。
②面会場所を取り決める。
③その女性に連れ添い、共に病院に行く。
④病院で保護誓約書（Schutzbrief）を手渡す
⑤相談員はその女性に「引き渡すお母さんへ」という手紙を手渡し、子どもの引き渡しについての流れを説明する。
⑥赤ちゃんの出産前に児童相談所に連絡を入れる。
⑦役所に提出する病院側の出生届は出さない。
⑧病院はモーセ・プロジェクトの支援員に出生証明書（Geburtsschein）を手渡す。
⑨女性妊娠相談員を通じた役所への申請。
⑩児童相談所の「出生証明元帳」の要請を受けて、成年後見裁判所（Vormundschaftsgericht）が後見人を指名する[3]。
⑪児童相談所の調停により、子どもを里親（8週間）に託すか、ただちに養子縁組の手続きを開始するかが取り決められる。
⑫通常の養子縁組の手続きは、公的に認められた養子縁組仲介所が実施する。

この手引きは、ドーヌム・ヴィテの支援員たちに共有されており、皆これに従って匿名出産の支援を行っている。社会教育・ソーシャルワークの理論を学んだガイス＝ヴィットマンは、筆者との対話の中で、「私たちの匿名支援は、方法化されなければならない」、と述べており、「私たちはそれを長い時間をかけて方法化してきた」と語っていた。ドーヌム・ヴィテは、単に匿名出産という構想を打ち立てただけでなく、その方法論的な吟味も同時に行っていた。

そのアプローチは、宗教的・慈善事業的というよりはむしろ、社会教育的・ソーシャルワーク的なものに近いと言えよう。一連のプロジェクトの始まりにおいては、キリスト教的な文脈も強く、慈善事業的な要素も多々見られたが、現在行われている匿名出産の手続きを見る限り、それは明文化され、方法化され、これまでの14年にわたる経験によって検討されてきた社会福祉援助技術的な様相を呈していると言えよう。

ゆえに、ガイス＝ヴィットマンは、具体的に母子の双方を方法的に吟味・検討された手段によって直接的に支援することを重視する。カトリックの思想を踏まえつつ、彼女は、実際に母と子を支援することを自らの使命としていた。先に挙げた彼女の引用文の中でも、「差し迫って困難な状況下にある女性が現におり、彼女たちにはケアが－ともすれば何年にもわたる同伴が－必要だ」、と述べている。赤ちゃんポストは、彼女にとっては、そうしたケアの断念を意味するものとなる。彼女は言う。「赤ちゃんポストで、緊急下の女性は救えません。医療機関の外で彼女たちが孤独に出産することを防がなければならないのです。産んでからではなく、産む前に私たちは母親を支援しなければならないのです。だから、私たちは匿名出産、匿名支援を打ち出したのです。赤ちゃんポストは、そうした緊急下の母親、そしてその赤ちゃんを助けられません」、と。

ガイス＝ヴィットマンは、なぜ赤ちゃんポストを認めないのか。それは、赤ちゃんポストを利用する母親が、自らの妊娠を隠し、医療機関等での受診を退け、一人で何の助けもないまま、トイレや自室で出産することを問題視しているからであり、それは出産前支援の欠如、すなわち母子支援の「行き届かなさ」を意味しているからである。赤ちゃんポストは、出産した後の母親の一つの選択肢であり、そうした緊急下の母親たちの医療機関での安全な分娩・出産の機会を奪う可能性をもち得るからである。これまで長い間、妊娠相談、妊娠葛藤相談、不妊相談、流産や死産に関する相談を行ってきたガイス＝ヴィットマンにとって、赤ちゃんポストは、自分たちの「専門性」を脅かすものでもあるのかもしれない。しかし、だからといって、ガイス＝ヴィットマンはこの匿名出産を最善の手段とは見なしていない。匿名出産は、やはり赤ちゃんポスト

と同様に、母子関係の断絶を引き起こす。完全な匿名性を認めず、かつ母親の身元も明かされない出産方法はないのか。そうした議論の末に出されたのが、匿名出産に代わる内密出産（Vertrauliche Geburt）である。

最後に、この内密出産を取り巻く近年の動向について記しておこう。2013年7月に大きな動きがあった。それは、通称「内密出産法（Gesetz zur vertrauliche Geburt）」の制定である（2014年５月施行）。内密出産は、母親の完全な匿名性を認める匿名出産とは異なり、母親の身元を相談所に伝えなければならない出産である。16年間－子どもが満15歳を迎えるまでの間－、「家族・市民社会義務のための連邦省（BAFzA）」で母親の情報を記した封筒は厳密に保管され、その後に子どもに母親の身元が通知される。出産後の16年の間で、母親の身元を知るのは所轄の相談所だけである。ただし、母親が自分の身元を絶対に明かしたくないという場合には、匿名出産も認める。また、赤ちゃんポストもこの法で禁止されるわけではない。この法案を、ガイス＝ヴィットマンもまたバイエルン州ドーヌム・ヴィテも高く評価し、同団体の公式ウェブサイトにおいて以下のような公式見解を示した。「バイエルン州ドーヌム・ヴィテは、内密出産法を成立させた連邦参議院の決断を歓迎します。というのも、相談業務に対する必要な権限の確実性と処遇の確実性がこれによって確立されるからです。[…]法案における手続きの規定によってその質が保障されます。中でもとりわけ専門能力をもった妊婦相談員らによる相談が行われることでその質が保障されます」[4]。かくして匿名出産の母ともいえるガイス＝ヴィットマンとドーヌム・ヴィテのまなざしは、自らが発案した匿名出産を経て、内密出産の可能性に向けられている。

おわりに

本論は、ドイツの赤ちゃんポストと匿名出産に関する研究において必ず触れられつつも、決して詳しく論じられることのなかったドーヌム・ヴィテの元代表ガイス＝ヴィットマンに焦点を合わせ、彼女のこれまでの歩み、彼女が赤ちゃんポストを容認できない背景、そして彼女によって現実化された匿名出産の実際の取り組みについて論じてきた。そして、彼女の思想的背景を解明した。

これまでドイツの赤ちゃんポストを学術的に追ってきた筆者にとって大きな気がかりとなっていたのが、ガイス＝ヴィットマンの存在であった。なぜ、ガイス＝ヴィットマンは1999年にモーセ・プロジェクトを発案したのか。匿名出産を打ち出しながらも、赤ちゃんポストから距離を取る彼女の背景に何があるのか。そもそも彼女はいかなる人物なのか。これらの問いに引き寄せられた筆者は、2013年８月になんのつながりもないままバイエルン州に向かい、何度かの挫折を経て、彼女との接触に成功した。本研究はその成果の一つである。

その結果として、ガイス＝ヴィットマンには、キリスト教徒という顔の他に、社会教育士、ソーシャルワーカー、宗教教育者、政治家、公益民間団体代表といった様々な顔があり、青少年支援というドイツの社会教育伝統の中に位置しつつ、その範疇にはおさまらない緊急下の母子の匿名での相談、同伴という新たな支援の可能性を切り拓いたことが明らかとなった。そして、赤ちゃんポストを含むドイツの新たな匿名支援の根底に、やはり教育学的な地平があることが解明された。今後の課題は無数にあるので、ここでは事細かに記さないが、これらの問題領域がいかなる教育学的言説に関連し、また教育学の地平と融合し得るのかが最も大きな課題といえるだろう。

最後に、実際に対話を行った筆者の印象としては、ガイス＝ヴィットマンは、とても力強く、またはるか遠くの異邦人の訪問も心から歓迎してくれて、まさに「勇敢な女性」そのものであった。彼女との直接的な対話がなければ、この研究は実現し得なかったと言えるだろう。ここで改めて感謝の意を表したい。

なお、本研究においては、文部科学省研究振興局・独立行政法人日本学術振興会による科学研究費の支援を受けていることを付記しておく。

引用文献

Biersack, Christiane, Babyklappe und anonyme Geburten, Vdm Verlag, 2008.

大串隆吉、社会教育入門、有信堂、2008.

大串隆吉・生田周二、吉岡真佐樹、青少年育成・援助と教育－ドイツ社会教育の歴史、活動、専門性に学ぶ、有信堂、2011.

柏木恭典、赤ちゃんポストと緊急下の女性－未完の母子救済プロジェクト－、北大路書房、2013.

Kuhn, Sonja, Babyklappe und anonyme Geburt, MaroVerlag, 2005.

Swientek, Christine, Die Wiederentdeckung der Schande, Lambertus, 2001.

Teubel, Alexander, Geboren und Weggegeben, Duncker & Humbolt/Berlin, 2009.

西希代子、母子関係成立に関する一考察：フランスにおける匿名出産を手がかりに、　本郷法政紀要10. 397-431、2001.

Moysich, Jürgen, Liebe Freunde des SterniPark, liebe Eltern, liebe Mitarbeiterinnen und Mitarbeiter, liebe Kinder（未公刊）、2005.

注

(1) ただし、今日では社会教育とソーシャルワークは同義で使用されるケースも増えてきている。

(2) Landesverband für Körper- und Mehrfachbehinderte in Bayern.

(3) 2009年よりケア裁判所（Betreuungsgericht）に改称された。

(4) http://www.donum-vitae-bayern.de/fileadmin/user_upload/Bayern/Landesverband/Links/_PM_Anonyme_Geburt_130607.pdf
（情報取得2014. 1 .30）